2023 年 1 月

第 32 回日本医療薬学会年会実施報告書

第 32 回日本医療薬学会年会
年会長　山本　康次郎
群馬大学医学部附属病院 薬剤部長

事 業 名： 第 32 回日本医療薬学会年会
主催者名： 一般社団法人日本医療薬学会
年 会 長： 山本　康次郎（群馬大学医学部附属病院 薬剤部長）
会　　頭： 山本　康次郎（群馬大学医学部附属病院 薬剤部長）
後　　援： 一般社団法人日本病院薬剤師会、公益社団法人日本薬剤師会、
一般社団法人群馬県病院薬剤師会、一般社団法人群馬県病院薬剤師会、
日本薬科機器協会、群馬県
実施日程： 2022 年 9 月 23 日（金・祝）～25 日（日）※現地開催、LIVE 配信
2022 年 10 月 11 日（火）～11 月 14 日（月）※オンデマンド配信
実施場所： G メッセ群馬　〒370-0044 群馬県高崎市岩押町 12-24
高崎芸術劇場　〒370-0841 群馬県高崎市栄町 9-1
会場数　　口演会場：13 会場
ポスター会場：1 会場
展示会場：1 会場

年会の趣旨

第 32 回日本医療薬学会年会を、2022 年 9 月 23 日（金・祝）～25 日（日）の 3 日間、G メッセ群馬・高崎芸術劇場（群馬県高崎市）において、現地開催、LIVE 配信、10 月 11 日（火）～11 月 14 日（月）にオンデマンド配信を実施した。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、本学会としては初めて現地開催、LIVE 配信、オンデマンド配信のハイブリッド方式での開催となった。

Society 4.0 として位置付けられる現在の情報社会では、知識や情報の共有の不足、分野横断的な連携の不十分さなどが露呈しつつあり、これらの問題点を解消し、新しい価値を生み出すとともに、地域の課題や困難を克服する社会として、Society 5.0 が提言されている。この Society 5.0 においては、医療薬学に対してもさまざまな変化や改革が求められており、先進技術の活用により、これまでとは大きく異なる次世代の医療が創造されることが期待される。また、現在、さまざまな時間的、技術的制約のなかでファーマシスト・サイエンティストとしての活動を行っているが、それらの限界が取り払われる Society 5.0 において、我々が行うべきことや、社会における我々の役割を示すことも求められている。そこで、本年会が、この Society 5.0 の医療薬学を作り上げていくためのキーポイントになればと考え、本年会のメインテーマを「知の融合で織りなす Society 5.0 の医療薬学」とした。

本年会では、情報技術を活用した先駆的な医療の開発に尽力されている先生方に特別講演、教育講演をお願いした。また、医療の DX (digital transformation) における薬剤師の役割を考える機会として、特別シンポジウムを企画した。他シンポジウムでは IoT (internet of things) や DX、RWD (real world data) などに関するセッションをはじめ、幅広い内容を企画した。

Society 5.0 は未来の社会像ではあるが、その基となる技術は着実に現実のものになっており、医療薬学の分野においても、先進技術を用いた様々な試みが行われている。本年会では、これまで各々が作り上げてきた医

療薬学に関する知見をしっかりと組み上げていき、Society 5.0 にふさわしい医療薬学という学問を織りなしていただきたいと考えた。

特別講演 2 題、教育講演 3 題を企画するとともに、特別企画シンポジウム 1 セッション、International Symposium 2 セッション、シンポジウムは、応募いただいた 73 件のうち 66 件（オンデマンド配信のみ 3 セッション含む）を採択し、年会企画セッション 10 件を加えて、76 セッションとした。

一般演題については、851 題の応募があり、不採択 1 題、取り下げ 3 題で、最終的に、口頭発表：176 題（うち優秀演題候補 20 題、YIA 候補 25 題)、ポスター発表：671 題の合計 847 題を採択した。その他、各学会賞受賞講演、市民公開講座も最新の内容を企画した。

本年会では、年会としては初めて、ネームカードの事前送付を行わず、当日会場でネームカード出力を行った。また、日本病院薬剤師会の研修単位発行に関して、該当セッション会場における QR コードを使用した入退室管理を行った。

事前参加登録者並びに直前・当日・会期後登録者に招待者（85 名）を加え、最終的に参加登録者は 10,241 名となった。なお、現地参加者数は 2,455 名、LIVE 配信視聴者数は合計 4,532 名、会期後オンデマンド配信の視聴者数は合計 6,781 名だった。

会費等の設定：

参加費	正会員	非会員	学生（会員）	学生（非会員）
事前登録	10,000 円	18,000 円	無料	3,000 円
直前・当日・会期後登録	15,000 円	23,000 円	2,000 円	5,000 円

プログラム集：2,000 円（当日)、2,500 円（事前・事後：郵送費含む）
市民公開講座：無料

事業内容：
1、メインテーマ『 知の融合で織りなす Society 5.0 の医療薬学』
2、年会長講演　1 題
3、会頭講演　1 題
4、特別講演　2 題
5、教育講演　3 題
6、日本医療薬学会　学会賞・奨励賞受賞講演　5 題
7、日本医療薬学会　Postdoctoral Award 受賞講演　10 題
8、特別企画シンポジウム　1 セッション
9、International Symposium (国際シンポジウム)　2 セッション
10、シンポジウム（公募、年会企画）　76 セッション（オンデマンド配信のみ含む）
11、市民公開講座　1 セッション
12、一般演題　847 題
　1）口頭　176 題
　　（うち優秀演題候補 20 題、YIA 候補 25 題（学生：5 題、社会人：20 題))
　2）ポスター671 題
13、International Session　28 題
　1）Oral　9 題
　2）Poster　19 題

14、共催セミナー　　28 セッション

15、日本薬科機器協会ワークショップ

参加者数:

	参加登録					
	正会員	非会員	学生（会員）	学生（非会員）	名誉会員	海外
事前登録	7,038	1,337	79	20	2	-
直前・当日・会期後登録	975	664	15	14	2	10
計	10,156 名					

運営組織：

年会長　山本　康次郎　群馬大学医学部附属病院

組織委員長　荒木　拓也　群馬大学医学部附属病院

〈組織委員〉

石澤　啓介　徳島大学病院

崔　吉道　金沢大学附属病院

三浦　昌朋　秋田大学

八島　秀明　群馬大学医学部附属病院

池田　和之　奈良県立医科大学附属病院

富岡　佳久　東北大学

〈企画検討委員〉

荒木　拓也　群馬大学医学部附属病院

阿部　正樹　群馬大学医学部附属病院

中村　浩規　群馬大学医学部附属病院

大林　恭子　高崎健康福祉大学

中村　克徳　琉球大学病院

青森　達　慶應義塾大学

城野　博史　熊本大学病院

原　佳津行　一般社団法人群馬県病院薬剤師会

八島　秀明　群馬大学医学部附属病院

関崎　直人　群馬大学医学部附属病院

永野　大輔　新潟薬科大学

岡田　裕子　高崎健康福祉大学

中村　智徳　慶應義塾大学

神崎　浩孝　岡山大学病院

藤田　行代志　群馬県立がんセンター

田尻　耕太郎　一般社団法人群馬県薬剤師会

〈実行委員〉

金田　亜季子　群馬大学医学部附属病院

諏訪間　綾子　群馬大学医学部附属病院

平尾　和明　群馬大学医学部附属病院

石川　雄也　群馬大学医学部附属病院

勝見　重昭　群馬大学医学部附属病院

大島　幸菜　群馬大学医学部附属病院

中山　典幸　群馬大学医学部附属病院

長嶺　歩　高崎健康福祉大学

前田　恵里　高崎健康福祉大学

里　美貴　昭和大学

佐藤　紀宏　東北大学病院

折山　豊仁　東京大学医学部附属病院

相川　潤　株式会社クスリのマルエ

本多　滋　群馬大学医学部附属病院

飯塚　誠　群馬大学医学部附属病院

大島　宗平　群馬大学医学部附属病院

樋口　裕哉　群馬大学医学部附属病院

高橋　理充　群馬大学医学部附属病院

田中　悠介　群馬大学医学部附属病院

高橋　雄太　高崎健康福祉大学

高橋　恵美利　高崎健康福祉大学

坡下　真大　名古屋市立大学

小澤　秀介　信州大学医学部附属病院

梅澤　理恵子　筑波大学附属病院

荒木　聖美　ヒルズレディースクリニック

（敬称略・順不同）

事業成果

第 32 回日本医療薬学会年会を、2022 年 9 月 23 日（金・祝）～25 日（日）の 3 日間、G メッセ群馬・高崎芸術劇場（群馬県高崎市）において、現地開催および LIVE 配信、10 月 11 日（火）～11 月 14 日（月）にオンデマンド配信のハイブリッド形式で開催した。

年会としては、新型コロナウイルス感染症の影響で第 30 回年会、31 回年会が完全 WEB 開催であったが、第 32 回年会では現地開催に加え、LIVE 配信、後日オンデマンド配信を行う、本学会の年会としては初のハイブリッド開催を実施した。参加者数は招待者を含め 10,200 名を超える参加者となった。

本年会のメインテーマは「知の融合で織りなす Society 5.0 の医療薬学」とした。Society 4.0 として位置付けられる現在の情報社会では、知識や情報の共有の不足、分野横断的な連携の不十分さなどが露呈しつつあり、これらの問題点を解消し、新しい価値を生み出すとともに、地域の課題や困難を克服する社会として、Society 5.0 が提言されている。この Society 5.0 においては、医療薬学に対してもさまざまな変化や改革が求められており、先進技術の活用により、これまでとは大きく異なる次世代の医療が創造されることが期待される。また、現在、さまざまな時間的、技術的制約のなかでファーマシスト・サイエンティストとしての活動を行っているが、それらの限界が取り払われる Society 5.0 において、我々が行うべきことや、社会における我々の役割を示すことも求められている。そこで、本年会が、この Society 5.0 の医療薬学を作り上げていくためのキーポイントになればと考え、本テーマを設定した。

特別講演 1 では、サスメド株式会社の市川太祐先生に「デジタル医療の未来像とその中で期待される薬剤師の役割」を、特別講演 2 では、群馬大学医学部附属病院　システム統合センターの鳥飼幸太先生に「医薬学改革の Society 5.0 が始まった～機械学習、標準化、量子コンピューティング～」を講演いただいた。

教育講演 1 では、慶應義塾大学医学部病院薬剤学教室の大谷壽一先生に「医薬品情報の科学的な収集、評価、活用～薬物動態を中心に～」を、教育講演 2 では、フォーネスライフ株式会社　CTO　和賀巌先生に「プロテオミクス解析とビッグデータに基づくデータヘルスケア」を、教育講演 3 では、東京大学医学部附属病院企画情報運営部の土井俊祐先生に「情報システムから見る電子処方箋のイロハ」について講演いただいた。

特別企画シンポジウムとして、「医療情報のこれからと薬剤師」と題し、オーガナイザーを奈良県立医科大学附属病院　薬剤部の池田和之先生、座長を群馬大学医学部附属病院　薬剤部の阿部正樹先生にお願いし、厚生労働省特定医薬品開発支援・医療情報担当参事官室　田中彰子先生に「データヘルス改革における厚生労働省の取組み」、医療データ活用基盤整備機構の岡田美保子先生に「全国で医療情報を確認できる仕組みとその情報利活用」、東京大学大学院医学系研究科 社会医学専攻　医療情報学分野の大江和彦先生に「処方情報の電子化における標準化とそのデータ利活用の課題と展望」、九州大学病院メディカル・インフォメーションセンターの中島直樹先生に「自身の保健医療情報を活用できる仕組みと PHR」をそれぞれ講演いただき、活発に討論いただいた。

公募シンポジウムには 73 枠の応募があり、66 枠を採択（オンデマンド配信のみ 3 枠含む）し、年会企画シンポジウム 10 枠を合わせた 76 枠のセッションを実施した。国際交流として International Symposium「 Challenge of Pharmaceutical Health Care and Sciences toward Society 5.0 -1, 2」を 2 枠（10 題）開催し、韓国、中国、台湾、日本における薬剤師による役割・取り組みについて紹介された。また、国際セッションを 1 枠開催し、米国と日本におけるがん薬物療法の相違について議論された。これらのセッションにおいては、新たな技術のトライアルとして、自動翻訳システムを導入した。

一般演題については、851題の応募があり、不採択1題、取り下げ3題で、最終的に、口頭発表：176題（うち優秀演題候補20題、YIA候補25題）、ポスター発表：671題の合計847題を採択した。例年通り優秀演題の選考を行い、候補20題から4題を選出、また、31年会に引き続いて、Young Investigator Award（YIA）を設置し、候補25題から6題を選出し表彰した。

また、International Sessionとして、28題（Oral：9題、Poster：19題）の英語発表が行われ、海外からも発表いただいた。

その他、「安心して子供を産み・育てられる環境を目指して～医療の立場から～」と題して、市民公開講座を企画し、信州大学医学部附属病院薬剤部の小澤秀介先生に「妊娠とくすり～健やかな子どもは健やかな母性に宿る～」、群馬大学大学院医学系研究科産科婦人科学講座の岩瀬明先生に「老若男女に知ってほしい現代社会における生殖医療の課題」をそれぞれ講演いただいた。メディカルセミナーも28セッション開催された。

単位認定に関しては、従来の日本医療薬学会医療薬学専門薬剤師、がん専門薬剤師、薬物療法専門薬剤師、地域薬学ケア専門薬剤師の単位認定を行い、日病薬病院薬学認定薬剤師制度については、セッション毎とし、該当セッションについては現地参加、LIVE配信、後日オンデマンド配信と参加形式を変えても取得できるようにした。なお、現地参加について、当日該当セッション会場にてQRコードを使用した入退室管理を行った。

また、日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師制度集合研修単位については、研修単位の管理運営上の問題から、現地参加者のみ取得できるように設定した。

本年会では、年会関係者・学会関係者、年会発表者・参加者のご協力により、ハイブリッド開催という今後の新たな年会のあり方の一つを提示することで、将来的な医療薬学の発展に貢献することができた。また、一部セッションにおいては、Live配信およびオンラインでの双方向性の議論を実施したことにより、さまざまな要因により現地参加が制限されてきた方に対して、年会での討論への参加を可能にする一つのきっかけを提供できたと考えている。一方、２年越しの現地開催かつ初のハイブリッド開催ということもあり、単位の取り扱い等に関する一部運営における準備の不足や、要旨の閲覧に関する環境構築の不十分さ、年会毎にwebアクセス方法が変更されていることに関する情報提供等の不十分さなどが反省点として挙げられた。これらの点については、学会事務局ならびに次回以降の年会関係者に引き継ぐことにより、より良い年会の構築に繋げていきたい。一方、コロナ禍が収束していない中での開催となり、年会での開催が期待された懇親会などの企画は断念せざるを得ない状況ではあったが、大きな混乱もなく盛会のうちに終えることができたと考えている。これは、日本医療薬学会理事会・事務局のご支援と、組織委員・企画検討委委員・実行委員・学会運営事務局など本年会開催に関わった全ての皆様のご尽力、またご参加いただいた皆様のご理解とご協力の賜物であり、こころより感謝申し上げる。

第32回日本医療薬学会年会　優秀演題一覧

演題番号	筆頭演者氏名	筆頭演者所属	演題名
23-05-O05*-1	前田　章光	愛知県がんセンター薬剤部	アベマシクリブ代謝物の体内動態に対するABCB1 及び ABCG2 遺伝子多型の影響の検討
23-05-O05*-2	大野　能之	東京大学医学部附属病院薬剤部	医薬品添付文書における CYP3A 阻害薬の併用禁忌の現状と課題
23-05-O07*-1	藤田　一馬	秋田大学医学部附属病院薬剤部	食道がん患者に対する術前化学放射線療法後の治療成績に及ぼす銅トランスポーター遺伝子多型の影響
23-05-O07*-4	土手　賢史	京都桂病院薬剤科	大規模診療情報データベースを用いた悪性リンパ腫治療薬の二次がんリスクに関する多角的評価

第32回日本医療薬学会年会　Young Investigator Award(YIA)受賞演題一覧

YIA（学生）

演題番号	筆頭演者氏名	筆頭演者所属	演題名
YIA1-2	竹村　美穂	大阪大学大学院薬学研究科	乳がん患者におけるカペシタビン誘発性手足症候群に対するプロトンポンプ阻害薬の予防効果

YIA（社会人）

演題番号	筆頭演者氏名	筆頭演者所属	演題名
YIA3-2	並木　孝哉	慶應義塾大学大学院薬学研究科医療薬学部門	ESBL 産生腸内細菌科細菌に対する血液透析患者の遊離形 CMZ 濃度を用いた PK/PD に基づく最適投与法の評価
YIA3-5	室井　宏仁	神戸市立医療センター中央市民病院薬剤部	COVID-19 患者におけるレムデシビルおよび主要代謝物（GS-441524）の薬物動態解析
YIA4-2	中川　祐紀子	金沢大学附属病院薬剤部	クエン酸塩含有製剤の同時懸濁によるランソプラゾール OD 錠の耐酸性能低下について
YIA5-3	荻上　尚樹	東京大学医学部附属病院薬剤部	透析実施条件を組み入れた薬物の透析除去率の網羅的かつ定量的な予測法の構築
YIA5-4	相良　篤信	星薬科大学	視線計測を利用した自動車運転時の抗ヒスタミン薬誘発インペアード・パフォーマンスの客観的検知法開発に向けた薬工連携研究

優秀演題・YIA 最終選考委員

荒木　拓也　　群馬大学医学部附属病院
大林　恭子　　高崎健康福祉大学
中村　智徳　　慶應義塾大学
中村　克徳　　琉球大学病院
岡田　裕子　　高崎健康福祉大学

（敬称略・順不同）